

# 詩人とその時代

——ゲオルク・ヴェールトと1848年——

中野和朗

## (一)

万物は生まれ、成長し、消滅するという過程をくりかえし、一瞬たりとも同一の様相をとどめることはない。一個の人間がそうであるし、その人間が集団で形成し、営む社会についても同じである。このような過程の経過、時間的軌跡とでもいったものが、いわゆる“歴史”の総体なのであろう。人間社会のあれこれの歴史的時代というものは、例えば「生産関係」に相応した政治形態の、生成・発展・消滅によって区切られ得るが、しかし「区切る」のは歴史を扱うための便法に過ぎず、時代は、途中で切ることのできない大河の流れのように、刻々と様相を変えながら連続しているのである。しかし、この大河の流れのような人間の歴史の流れは、いったいどこへ向って流れていくのか？ これはたいへんな難問であって、正解を出すのは難しい。だが、もし人間の理性というものが信頼に値するものだとすれば、人間はみずからのために、みずからの力によって、みずからの歴史を創っている、ということができ、だとすれば人間の歴史の流れは、地獄の深淵へと落下するのではなく、樂園へ向って限りなく流れ続けると言うこともできよう。個々の人間にとっても、地獄へ墮ちるよりも極楽往生することの方がはるかに希わしいことにちがいなかるうから、人類にとっても、人類の歴史の流れが地獄の奈落への落下ではなく、樂園への道をたどることの方がはるかに望ましいことにちがいない。

しかし、人間が過去の歴史の中で行なってきたこと、現在行なっていることを思いあわせると、ともすれば、人間の理性などというものが、まことに不甲斐ないものに思われて心細くもなる。

現在の「核軍拡競争」や、巨大な「飽満」と巨大な「飢餓」の共存という事態などをみれば、人間が、永遠の樂園を求めているなどとはとても信じがたいことに思えてくる。そしてこのような状況が、深く「政治」と直結していることは誰の目にも明かなことである。だから政治は、どうあっても「狂気」にではなく、「正気」の手にゆだねられねばならないと思わずにはいられない。

人間の営為のすべては、人間の歴史の流れが、樂園へと続くものとなるよう、そのことのためにのみ貢献するものであること、つまり、そのすべてが「理性」の側のものであることが願わしいことなのではないだろうか。ところで、文学はどうか？ 「狂気」に深い親近性を持ちがちなものであればあるほど、文学は「理性」に属するものであることの立場表明も簡明にしやすいであろうし、またそれが是非ともなされねばならない。

文学の政治との関わりをひどく、ほとんどヒステリックに、嫌悪する人びとがいる。

しかし、ゴットフリート・ケラーは、いみじくも「いまの時代はすべて政治である。われ

われの靴底の革から、屋根のてっぺんの瓦にいたるまで政治と結びついている。煙突から立ちのぼる煙は政治である』と述べているが、「文学」は、勿論、靴底の革や屋根の瓦や煙突から立ちのぼる煙に較べて、政治との結びつきの点でいささかも劣ることはあるまい。「反政治的文学」とか「非政治的文学」の主張やその擁護ほど荒唐無稽なものはない。それらはいずれも反政治的立場、非政治的立場という政治的立場の歴然たる自己表明にはかならないからだ。文学は、たしかに政治そのものではないが、決して文学と政治は切り離せぬものである。文学はすべて政治的であり、したがって「政治的」であるかどうかを吟味することは徒勞である。文学が「狂気」のものであるか「知性」のものであるか、そのいづれのものであるかこそが問われねばならないことである。

## (二)

ひとりの詩人、作家の偉大さは、かれの仕事が、人類の歴史を楽園へと導く人類的事業にいかんにか貢献しえたかによって測られねばならない。

勝れた詩人・作家は、なによりも人間にたいして深い関心を寄せるものであり、その関心は愛にもとづいている。かれが人間の美しさを詠うのはそれに因っている。人間のはかなさ、哀しさ、苦しさを詠うのもその故である。かれの人間への愛は、遠く人類の未来に楽園を展望し、それへの道を阻むもの全てに対して敵対する。かれは敵対するものに猛けだけしく戦いをいどむ。人間を愚弄するもの、人間を墮しめはずかしめるもの、人間を抑圧するもの、人間に苦しみと貧しさをおしつけるものに対して、かれが徹底して人間を愛する分だけ徹底してそれらと戦うのだ。

我々の生きるこの世紀は、連綿と続く人類史の中ではほんの前史の緒にすぎない。まだまだ未熟で野蛮の時代である。そしてあの啓蒙精神が装いをあらたにして何回でも呼び出されねばならないだろう。

前世紀の前半のドイツに、シリウスのように現われて消えていったゲオルク・ヴェールト(1822—1856)も、現代に甦らされねばならない詩人のひとりである。

かれが生まれるのに先だつおよそ10年の間に、重要な同時代人のなんんかが生まれていた。F. フライリヒラート(1810)、G. ヘルヴェーク(1817)、K. マルクス(1818)、F. エンゲルス(1820)等である。かれらはひとしくあの人類の大事業に組し、そのために熱血をたぎらせた戦士たちであった。そしてヴェールトの良き先導者であり、戦友であった。

ヴェールトは、リッペ侯国デトモルトのプロテスタント地方総監督フェルディナント・ヴェールトの三男として生をうけた。かれはギムナージウムに進んだが、二人の兄がともに修学中で、(多分家計のためと推測されるが)中退し、わずか14才で、当時この地方の商業の中心地であったエルバーフェルトの卸し問屋で商人としての徒弟の修業を始めることになった。これを皮切りに彼の実業界との因縁は深まる。ちなみにそれを履歴書風に記すと次のようなことになる。

1836—1840 エルバーフェルトの卸し問屋で徒弟修業。

1840—1841 ケルン、グラープマイナーツハーゲン商会の帳簿係。

1842—1843 ボン、フリードリヒ・アウスム・ヴェールトの織物製造会社の事務員。

1843—1846 アウグスト・アウスム・ヴェールトの営む銀行で文書係。職を求めてイギリ

スへ渡り、(10月) マンチェスター、パッサヴァント織物製造会社ブラッドフォード支社事務員。

1846— エマニュエル・アンド・サン社ベルギー・オランダ・フランス担当代理人としてブリッセルに勤務、

[1847年 共産主義者同盟へ参加。1848年 パリ2月革命。3月革命。マルクス、エンゲルス等とともに「新ライン新聞」発刊。旺盛な文筆活動。「ドイツ商業生活のユーモラスな寸描」「有名なる騎士シュナプハーンスキーの生涯と所業」など。]

1849— エマニュエル・アンド・サン社と再契約。

[11月4日「シュナプハーンスキー」執筆の理由で3ヶ月の禁錮刑の判決。1850・2・25—5・26までケルンにて服役] 服役後 ポルトガル、スペイン(1850—51)、西インド諸島、南米(1852)へ商用旅行。

1855—56 再び西インド諸島へ。

[1856・7・30 ハバナにて黄熱病で死す]

ヴェールトは、たしかに詩を創り、小説を書いた。しかしその短い生涯のうち実際に文筆活動を行なったのは、19才から27才にかけてのわずか8年間にすぎなかった。これと較べると、上に掲げた商人としての活動は、14才から死ぬまで続けられ、かれの本職はまちがいない商人であったといつてよからう。しかも彼は、実業者として実に卓抜した才能を持っていたのもたしかなことである。しかし、その一方、すぐれた文学的才能も併せもっていた。しかもかれは、なによりもあの人類史の偉大な大事業への加担者であり、その列につらなる者たちに共通のあの資質、即ち、優しい心、熱烈な正義感、純朴な人間愛、貧困・抑圧・差別への憎しみ、などを身につけた者であった。

こういうタイプの人間は、その時々体制の秩序、モラル、慣習、常識と軽率にもたちまち衝突してしまう。ヴェールトもその例にもれず、1843年、21才の時、はやくも、言論出版の自由の立場擁護の論を展開し、さらにはボン市長の反ユダヤ的言辭(人種差別)を批判するなどという不将な言動をとって当然解雇されるという目に合っている。しかも、職を求めてイギリスに渡り、ブラッドフォードで職を得るが、それと同時に、不運なことにエンゲルスとの面識も得たのであった。ヴェールトにとってこの科学的社会主義の始祖と識ったことは、かれの持って生まれた危険な傾向に拍車をかけるようなものであった。二人の親交は急速に深まり、ヴェールトはこの先達から学問的知識、物の観方を吸収することになった。たとえば、エンゲルスと連れだつてのブラッドフォードの貧民街の観察、L. フォイエルバッハの哲学やイギリス古典経済学の学習などである。そしてついに、K. マルクスとの出会い(1845)がやってくる。

ヴェールトは、この頃かなりこまめに近況報告をデトモルトの母に宛てて書き送っているが、母親は息子のこのような危惧すべき行動を歓迎せず、そういったことをやめるようにとたびたびヴェールトに書き送ったことがうかがえるが、ヴェールトはこのような母親の手紙に応えて、1845年7月19日付の手紙で次のように書いている。

……(略)とこで、ぼくはこれから先もあなたの意志やあなたの意図にまったく反する事をさらにいくつもすることになるでしょう。ぼくは二度と再びこのようなおねが

いはいたしません、どうかぼくにわが道を行かせていただきたいのです。ですが、どうか信じていただきたいことは、ぼくは、なにごとにも全く純粋な意図から行動しているということです。

ぼくは「ルンペンコムニスト」の一人です。世間では、かれらを口をきわめてののしりますが、かれらの唯一の罪はといえば、かれらが貧しく、虐げられた者たちのために戦場に出かけ、生死を賭して闘っているということだけなのです。

金持ちの旦那衆には足もとに気をつけてもらいましょう。民衆のたくましい腕がぼくたちの味方なのです。(略)<sup>2)</sup>

さらに、ヴェールトのこのような傾向、かれの信条と真情がもっとも端的に吐露されているものは、1847年9月末のブリュッセルでの「自由貿易会議」におけるかの有名な演説である。ヴェールトは、この会議の労働者階級唯一の代表であることを自認し、それを自負して、その演説を熱烈におこなったのである。

(略) 私はあえて働く人々に代わって、とくに500万のイギリス労働者に代わって話させていただく。それは私が、私の生涯の最もすばらしい年月のうちの幾年かを彼らとともに過したからであり、私が彼らを知り、彼らを評価しているからである。(略) これまで(労働者は)人間らしい扱いをうけないで、牛馬のように、いや品物のように、機械のように扱われてきた。

保護関税制度は実際には労働者を保護するものではなく、また自由貿易も決して労働者の悲惨な状態を変えることはないだろう。自由競争はあらゆる形で生産を促進するであろうが、しかしまさしくそのために、同じ割合で過剰生産と市場の滞貨と商取引の停滞をうながすであろう。自由貿易の制度を確立すれば、かの恐るべき激動は終りを告げると自由貿易論者は主張するが、まさに正反対のことが生じよう。

諸君、これを私の個人的見解にすぎないものと考えないでほしい。これは同時にイギリスの労働者たち——実際その知性と活力のために、私の支持と尊敬をあつめているひとつの階級——の考えでもあるのです。(略)

私は、自由貿易が自分たちに奇跡をもたらすだろうなどとは信じていないこれら数百万の人々の名において、諸君に要求する。諸君が労働者の状態を実際に改善しようと思ふなら、別の手段を考えていただきたい。(略)

私はくりかえす。諸君の自由貿易をどこまでも押し通すならそれもよかろう。しかし同時に働く階級のために別の措置をあわせて考えてほしい。さもなければ諸君は、後に悔いをのこすであろう<sup>3)</sup>。

### (三)

「1848」年というのは、もはや単なるヨーロッパ史の「ある年」を表示するだけではなく、それは、「政治的変革」、「革命」といった意味内容を表示する代名詞になっているといってもよいほどである。たしかにこの年は、記録に残すに十分価いする歴史的年であった。ヨーロッパ諸国で中世的封建制の「生産関係」と、それに相応した封建君主の政治権力が、次々

と転覆させられて、時代の檣舞台から姿を消し、代って近代的資本主義的「生産関係」と、その担い手であるブルジョアジーが登場するという、時代の大きな転換期を象徴する歴史的社会的現象が集中的に現われた年であった。

長い長い中世の時の流れの中で、封建制は十二分に爛熟し、文字通り熟した柿の實が枝から落ちるように消滅し、それにとって替った資本主義制の基礎もその時代の中で十分に醸成されていたのである。なるほど、資本主義的生産関係の中での主要なもうひとつの力である労働者階級も同時に階級形成をなすほどに育成されてはいたが、かれらが担うべき政治権力に相応する社会主義的生産関係はまだまだ遠い先の話であった。19世紀の変革は、資本主義的生産関係への移行にすぎなかった。したがって、そのような変革の時代に、出番をくりあげて次に登場すべき労働者階級が登場しようとした時、歴史の舞台の前面から舞台裏へと追い戻されることになってしまったのも歴史的必然というべきであろう。1848年に象徴される変革の時代は、政治形態で見れば、いうなればフランスに代表されるように、君主制から共和制への転換の時代であった。しかし、世界史の中で、この転換の時代に健全な転換に成功しなかった国々があった。イギリスや日本、オランダ等々では、そのブルジョアジー支配がいまや歴史的使命を終えるに十分なほどに熟し切ったかに見えるここにもいたっても、依然として共和制は実現していないのだ。これは、いうなれば、もはや老鳥となった鶏がいまだに卵の殻を尻にくっつけて引きづっている姿に似ている。

ところで、ヴェールトは、1848年という激動の年にどのように考え、感じ、どのように行動したのだろうか。この事情は現存するかれの四通の手紙からうかがい知るほかないが、1848年の新年をヴェールトはドイツで迎えている。そしてデトモルトに母を訪ねた後、再びブルュッセルに戻った。2月24日のパリの革命の知らせをヴェールトは、ここで受けとった。かれは、とるものもとあえずパリへ直行した。そして、3月11日付の手紙で、母に宛てて、パリの様子を次のように書き送っているが、そのリアルな描写は、当時のパリの熱気を生々しく伝えており、ヴェールト自身の感激が行間にはじみでているように思われる。

(略) 困難で、しばしば中断された旅の後、ぼくはここ(訳註 パリ)に夜中に到着しました。それは、2月の最後の週の水曜日でした。パリケードがすべて、まだそのままになっていました。かがり火が燃えていました。そして国民義勇軍(Nationalgarde)が街の角々を行進していました。ぼくは、案内人と一緒にとある歩哨所にいき、ホテルを尋ねました。ある旅館の主人が詰め所にい合わせて、即座にぼくたちを案内してくれ、ベッドをしつらえてくれました。彼は、制服に身を固め、頭にチョコ(訳註 筒形前立てつき軍帽)をかぶり、腰にサーベルを着けていました。

翌朝、ぼくたちは、ただちに Reforme の Bureau へ、そして National の現在の政府の第二 Organ の Bureau へ赴きました。そしてパリ在住のドイツ共和国支持の大デモを組織するためのアピールを発令しました。この集会は、先ず Café Mulhouse でひらかれました。そして、詩人のヘルヴェークが会長に選ばれました。ぼくのほか何人が委員に選ばれました。

ぼくたちはそれから Valéantino ホールで、4000人の人びとの前で会議をひらきました。そしてフランス国民への、ぼくたちによって起草されたアピールが、はげしい論争ののちみごとに採択されました。水曜日に、かくして、ぼくたちすべてのドイツの民

主義者たちが、Carrousel-Platz に集まりました。——7000の男たちがやってきました。みなは四列縦隊になりました。黒赤金の旗と、三色旗 (Trikolore) が先頭ではためていました。そしてぼくたちはセーヌ河岸を地方政府にわれわれのアピールを手渡すために Hôtel de Ville へ向って歩いていきました。ぼくたちの隊列の先頭で500人の歌い手たちがフランスとドイツの歌を唱いました。

委員会のメンバーは、Hôtel de Ville の前で集団を離れ、われわれは、大ホールで Ledru-Rollin, Crémieux, そして Dupont de l'Eure たちに迎えられました。

ヘルヴェークがわれわれのアピールを読みあげました、すると Crémieux が本当に感動的な態度で応えました。それから記念の贈物として私たちの旗が、アメリカとその他の国々の国旗と同じように、共和国の聖殿に掲げられるために懇請されました。こうしてわれわれは、あの偉大な革命の英雄たちと心から握手を交して別れたのですが、無数の人びとがぼくたちの引きあげる隊列に徹乎して加わり、「ドイツ万才!」「共和国万才!」と叫びました。夕方ぼくたちは、Juli-Säule に到着し、そこで、ぼくがこれまでに体験した中で最も美しい日の一日の最後を祝ったのでした。

お母さん! ぼくがここで、この14日間見たり、聞いたりしたことをお話しすることはできません! そのようなことはとてもことばで伝えられるものではありません。街の路上で、嬉し泣きできるような情景は、その場に居合わせたものでなければ判らないでしょう!

世界の最も素晴らしい国民の一つが、3日間でかれらの自由を奪回したのです。そして、君臨する悪漢どもの中でもっとも悪らつなものをその一味もろとも根こそぎ壊滅させてしまったのです。それ以上にことばを必要とするでしょうか? 全フランスが共和国に賛成しています。そしてよし乗り切らねばならない幾多の困難が起ろうと、勝利を確固たるものとするために、国民の全てが一致団結しているのです。(略)

たたかいたおれたひとびとの葬儀は、ぼくが見たものの中でもっとも感動的なものでした。100万のひとびとが葬列とともに歩きました。40万の男たちがむき出しの武器を手にしていました。秩序を懸念する者などひとりもいませんでした。だれもがそのことに心をくわいていたからです。

朝から夜中まで、ぼくは、あらゆることに関わりをもちました。そして月曜日にはふたたびブルュッセルへ戻らねばならないことを考えてただおどろくばかりです。

ぼくはいま、以前は Palais Royal であった Palais de la Liberté の Cabinet Valois に座っていますが、ぼくの周りを20人の“ぶん屋”(訳註 新聞記者)がとりまいています。いま、ここを支配している活動は、まったく想像を絶するものです。

新聞を丹念に読んでください。いま新聞は読むに値します。でも、ドイツ人的猜疑心は願ひ下げにしてください。この革命は地球の形を一変させることでしょう——そしてそれはまた必要なことなのです!——共和国万才! 敬具<sup>4)</sup>

1848年3月18日、ベルリンに革命が起きた。ヴェールトは、ドイツへ急ぎ、ふたたびブルュッセルへ戻った。その間にマルクスはブルュッセルから強制的に追放されてパリにいた。

1848年3月25日、ケルン発マルクス宛の手紙は次のように認められている。

数日来私はケルンにおります。何から何まで武装されています。ベルリンの確約など信用されてはいません——総選挙、無条件の出版の自由、集会の自由といったことだけで満足させられることでしょう——旧貴族議会（Landtag）は民衆の目にはなんの効力もありません、そして化けの皮がはがれ、徹頭徹尾民主的でないことが明らかとなった旧議員のすべてが観衆の手によって一掃されるのです。今日5名の議員が、王に事態のすべてを説明しにここからベルリンに向け出発します。新しい総選挙によって生まれる議会だけが承認されるのです。フランクフルト帝国議会にもこのことがあてはまります。当地から数名の兵とが、議員たちを監視するために派遣されます。ここで成就されていることはことごとくかなり民主的であるにもかかわらず、共和国ということばは怖れられています。ですからパリからドイツ人が侵入してきたりすればここでは歓迎されないことでしょう。

コブレンツとライン河上流への地域では共和国に賛成よりも反対の空気の方が強いそうです。

共産主義という言葉がもっとも怖ろしい言葉になっています。共産主義者などと名乗り出たりすれば投石による死刑に処せられることでしょう。ビュルガース Bürgers やド・エステル d'Estier 等は新しい新聞について語っています。しかし確保されていると信じられている基金が私にはまだ本当とは思えません。

パリに腰をすえてなどいないで、こちらへ出て来てくださればほんとうに申し分ないのですが。とにかく当面やることがいっぱいです。警察はたいへん弱体化しています。大赦がこれまでのところ実際になされているようです。

追伸：テデスコ（Tedesco）はふたたびここブルュッセルにいます。マインツ Mainz はわれわれとケルンにおりました。ビュルガース（Bürgers）はケルンの人たちによってどうやらフランクフルトへ派遣されるようです。

度重なる旅行のため私の財政は逼迫しています。折り折りにお貸しした50フランをラインハルト宛お払いいただけないでしょうか？そうしていただければまことに幸甚です。ベルリンでは死者、市民500人、兵士800人。さらに負傷者が毎日死んでゆきます——<sup>5</sup>。

さらに1848年3月27日付ブルュッセル発母宛の手紙は、次のように伝えている。

（略）リッペ州での政治的変革にたいして祝意を表します。デトモルトは理性ある人びとが大勢おられるのですから、それ以外の事態は予想されませんでした。他の諸州もそれにならっています。そしてなおも旧態依然たるものにまもなく同様に手が加えられ、この点においてもフランス人に続くことを希みたいものです。（略）

祖国のために死ぬこと

それは美しい運命

生きるにもっともふさわしいのは

祖国のために死ぬことだ！

これはパリの若者たちが、バリケードの中に入っていた時歌った最も美しい歌の一節です。フェルディナントが生き残ったということで、ぼくは当然のことながらベルリンの革命を二重に喜ぶことができます。もっと違った事態になっていれば、ぼくたちはそ

れをさらに誇りとすることができたことでしょうに！

パリからここにふたたび戻って、数日ブルュッセルに滞在し、先週の月曜日に Verriers へまいりました。そこには丁度ドイツからの大ニュースがとどいたところでした。ぼくは簡単に所用を片付けるとケルンへ急行しました。Gürzenich での国民会議 (Volksversammlung) で古い知人のすべてに会って、かれらが闘いottaた自由を見事に行使し得ていることが少からず喜ばしく思われました。ぼくたちはケルンで新しい新聞を創設することの相談をしてから、26日にここへ戻ってまいりました。

このようにぼくは実際に、セーヌ河畔でもライン河畔でも、最高の激動の瞬間のただ中に居合わせたのですが、ただ残念なことは、正真正銘の火 (das rechte Feuer) に会わずじまいであったことです。——この地からぼくの知人たちのほとんど全てが、いまでは消え去ってしまいました。ある者はかなたへ、またある者はこなたへと、全てが散り散りばらばらになってしまいました。(略)

あなたはお元氣とのことでなによりです。いつものことながら遠者であることを知らせるよにとのきついお達しですので申し上げますが、ぼくはきわめて快調です。ただし、あちこち旅行でとび廻ったお土産に、歯痛を持ちかえってしまいました。それ以外には異常はありません。2月4日以来ブルュッセルの自分のベッドでは3回寝たきりで、他は旅の空でした。今晚ぼくはグラス一杯のラムに砂糖を入れて飲むことにします。身体を温めて眠れば、明朝はアポロのように快活に、アドニスのように美しく目覚めることができるでしょう。この程度に申しあげればご満足いただけるでしょうか。ですが、他のひとびとが世直しのために闘わねばならないこの時に、家の中でびんびんして座っているということは本当に面目ないことです。(略)

一年前、Béranger は「哀れな王達はすべて溺れさせられるだろう」と歌いました。いま、すでにこれが現実のものになり始めています。いたるところで、いたるところです！ 共和国万才です！

ここベルギーでは、いま事態は特別です。王は、自分が放り出されようと保持されようと、ひとびとの意志にまかせました。かれはなかなかの哲学者です！ ——そこでいまだどうしようかとひとびとは思索しています。多分まもなく、ぼくたちも共和国市民となることでしょう。ですが、ここでは事態は、流血の戦いではなく、議会での多数にかかっています。その多数はやがてあらたに選ばれますが、その時すべては明らかになるでしょう。善良なレオポルトはほんとうに利口者です。

もっとお話しせねばならないことがありそうですが、直ぐ返事をせよとのお申しつけですのでこの辺にいたします。商売は勿論まったく不可能です。誰も売ったり買ったりすることなどに頭がまわらないのです。幸いにもほかのことをやるいとまはあり、ほかのことならこと欠くことはありません。<sup>6)</sup>

#### (四)

1848年、革命への政治的活動のほかに、ヴェールトは、またその一環でもあった文学的活動のもっとも重要なものを遺している。それは、かれの生存中刊行された唯一の作品である『有名なる騎士ジュナプハンスギーの生涯と所業』(“Leben und Taten des berühmten



Ritters Schnapphanski”)と「ケルン新聞」「新ライン新聞」などに連載された『ドイツ商業生活のユーモラスな素描』(“Humoristische Skizzen aus dem deutschen Handelsleben”)である。前者は、歴史の進歩にとって有害なもの、“パラダイスへの道”を阻むもの、つまり反革命、反動の担い手としてのユンカーの典型、シュナプハンスキー(フランクフルト国民議会の極右議員 F. v. リヒノフスキイ侯爵。すでにハイネによって痛烈な諷刺の対象とされていた)を徹底的に Satiere の対象とし、その本質を暴露している。

また、後者は、新興ブルジョアジーのひとつの典型、企業経営者のプライス氏と、かれの周辺の人びと(出張セールスマン、ブローカー等々)とその行動を、これまたするどい諷刺のペンで完びなきまでに槍玉にあげている。これらの作品に代表されるヴェールトの文学は、ヘルヴェークやフライリヒラートのそれと違って、政治的スローガンを詩の形で叫ぶというのではない。若きドイツや三月前期の詩人たちの「傾向文学」、芸術的形式は手段であるとする文学とは違っている。登場人物のそれぞれの個別の特徴が、その時代の奥深い本質と結びついたものとして適確に把握され、さらにはそれが、「自然でたくましい官能と肉欲を表現する達人」(エンゲルス)<sup>7)</sup>と評価されるヴェールト独特の文体によって、ドイツ文学史の中では稀有ともいえるさまざまな人物像の傑作が創り出されている。

このようなヴェールト文学の一種独特の世界は、ヴェールトが詩人や作家としてしか生きられなかった他の多くのドイツの詩人や作家とは違って、かれが、実社会の中でたくましく生きることできた有能な実業家でもあったということ、そしてその実業的活動を通して、リアルな豊富な体験をわがものとしていたということによるところが大きいと思われる。

かれの書簡類や、文学的著作から、かれが民衆の貧困からの解放、共和制、よりよき社会の到来を革命にたいしてどんなに強く期待していたかを知ることができるが、その期待が純粹で理想主義的であればあるほど、それだけますます革命の挫折は、かれに失望と落胆を与えずにはいなかった。

「僕は最近さまざまなものを書きはしたが、なにひとつ仕上げはしなかった。というのは僕は文筆にはなんの目的も、なんの目標も見ないからです。もし君が経済学について書くとするれば、それには意義もあるし、道理もある。しかし僕は？ まずいしゃれや、つまらない冗談をとぼして祖国のしかめつら連中に間抜けな笑いをうかべさせてみたところで—ほんとうだよ、こんな惨めなことってあるもんじゃないよ！ 僕の文筆活動は『新ライン新聞』とともにきっぱりと終わったのです。」(1851年4月28日付マルクス宛)

この手紙が、革命の挫折が、詩人ヴェールトの終焉であったということを語っている。

## 註

ヴェールトの書簡類は Bruno Kaiser (Hersg.), “Georg Weerth Sämtliche Werke in fünf Bänden” Aufbau-Verlag Berlin, 1957 (以下 SW と略記する) および, Jürgen-W. Goette, Jost Hermand u. Rolf Schloesser (Hrsg.), “Georg Weerth. Vergessene Texte. Werkauswahl in zwei Bänden” informationspresse-C. W. leske. Köln 1975 を用いた。

- 1) G. Keller, “Sämtliche Werke in acht Bänden” Aufbau-Verlag Berlin, 1961, Bd. 8, S. 229
- 2) SW. Bd. 5, S. 170~

そのほか、1844年11月22日母宛書簡、SW. Bd. 5, S. 136~, 1844年12月24日ウィルヘルム宛書簡、SW. Bd. 5, S. 139 なども重要である。

3) SW. Bd. 2, S. 128~

「M・E芸術・文学論」③大月書店 1975, P. 283~

4) SW. Bd5, S. 279~

5) SW. Bd5, S. 282~

6) SW. Bd5, S. 283~

7) 「M・E芸術, 文学論」③大月書店 1975, P. 289~

エンゲルス「ドイツ・プロレタリアートの最初で最も重要な詩人ゲオルク・ヴェールト」